

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 135 号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2004.06.03 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の  
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_index.htm](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm)

\*\*\*\*\*発行部数 1609 部\*\*\*\*\*

---

□ 目 次 □-----

<今週の提言>情報化時代とメルマガに思う 安富六郎

<読者の声>増山さんから：丹羽さんから

<旬を食べる一野良からの便り・3> “キヌサヤエンドウ” 小泉浩郎

<日本たまご事情>オムライス 愛鶏園・齋藤富士雄

<山崎農業研究所情報>

◇山崎農研・日仏農学会合同研究会（第 112 回 定例研究会）速報（その 1）

……環境保全と生態系と地球環境：陽 捷行氏（農業環境技術研究所理事長）

<79 歳の意見>年金問題の影で日米戦時体制は進む 原田 勉

<丹羽敏明の戦争体験>35 “こぼれ話”（その 2）

<農文協図書館情報>農文協図書館・原田太郎

<編集後記・同人の近況報告>5 月 20 日～6 月 2 日

---

<今週の提言>情報化時代とメルマガに思う

---

3 年前に、BSE 問題で調べものをした。そのときイギリスの新聞 (G) を参考にしたかった。その日刊紙が閲読できる図書館を探した結果、四谷の J 大学ということになった。そこへ出かけて、記事をひとつひとつ丹念にみて、2 日かけてようやく目的の一部を探すことができた。しかしこの程度の記事であれば、インターネットで検索をかければ 30 分もあればよいことがわかった。これは私にとって驚異であった。アメリカ農務省のデータなども国内と同じように引き出せるものが多い。ウイルスやアクセス秘密厳守の商売に邪魔されることもあるが、近代技術の恩恵は確かにある。

一昔前には一般に情報は強い側に握られがちで、内容操作も自由といわれていた。ところがいまは、情報を隠したり、一方的な否定ができなくなっている。

たとえば、イラクやパレスチナの状況がインターネットで市民レベルでも発信されるようになってきているが、こうして真実を広げ、大きな世論にまで発展させるインターネットの力が次第に明らかになりつつある。もちろん間違ったもの、デマやまっかな嘘もあるだろうが、情報を受け取る側がしっかりしていれば、真実をつかむことがより容易な時代になっているとみていいだろう。

われわれは、インターネットを通して最新のニュース（カタール A-J）やエジプトの日刊紙（A-A）を自由に見ることができるようになった。そこには日本やアメリカの大新聞には載りそうもない報道がたくさんある。その中にこんな言葉を見つけた。「悪意ある報道がメディア・キャンペーンで吹き払われる」。そして正しい情報から市民運動も起こることを期待するというのである。

世界の平和運動が偏ることのない正しい情報伝達から始まろうとしているように思われる。電子耕も世界の農業と平和につながるメディアとしての社会的責任をもっと強調してよいだろう。読者や会員諸氏が自分の意見や考えを積極的に投稿されればさらに広く読まれ、より魅力あるメルマガになるのではなかろうか。

安富 六郎  
山崎農研会員、土地利用学  
y.noken@taiyo-c.co.jp

---

<読者の声>

---

●05/26 増山博康さんより：「環境」から考える消費者運動の再生

世界食糧機構（FAO）によると、現在、農産物の品種の4分の3が消失し、動物性タンパク質は、10種類の生物に集中しているそうです。種の多様性の維持という点からはゆゆしい事態と言わざるを得ません。

以前、三浦の農家から聞いた話では、流通の関係で青首ダイコンが主流になり、三浦ダイコンは敬遠されるようになったとのこと。ただ、自分自身も実験農場を抱えて、「週末農家」をしてみると、三浦ダイコンの方がトウ立ちも遅く、秋に遅まきしても何とか育つので、売り物としても維持しやすい特徴があ

ります。大規模な流通と、「半農半エックス」の「新兼業農家」が行う流通の都合はどうやら異なるようです。

動物性タンパク質という点から考えると、畜産物が数種の哺乳類や鳥類に集中するのに対し、海産物は多様な魚類や甲殻類などからなっています。世界魚類センターによると、現在、第三世界を中心にタンパク源として魚の消費が伸び、海の汚染とあいまって、漁獲量の減少が問題となるだろうとのこと。

ひとりが一日に出す窒素量は約 13.3 グラムでこのうち 10 グラムはトイレから排出されるとされます。現在の下水処理場では窒素やりんは半量程度しか浄化されないため、東京湾に流入する窒素負荷は今後 30 年で 5%程度しか減少しないとされます。全世界で赤潮プランクトンの神経毒によって既に 1000 人以上が死亡しているそうです。

このように、私達の「食」は、種の多様性や海洋汚染などと密接に結びついているのです。

生活と環境問題の関係は、食にとどまりません。

例えば、住に関して言えば、コンクリートの劣化は、せっかく購入したマンションの寿命にも関わる問題です。公共建築物の寿命と言うことになれば、税金、財政にも関わります。鉄骨は、アルカリ性で表面に不動態の皮膜を作りますが、コンクリートが「中性化」すると、この皮膜が失われるそうです。そして、コンクリートの中性化問題は、酸性雨や大気汚染による酸性物質被曝と関わりあっています。

解決策を展望した場合、都内の窒素酸化物の発生源の 3分の2は、クルマによるとされます。現在、自動車メーカー自体も、燃料電池や I T S などの研究を進めており、都市型交通の新しいあり方が問われています。

以上のように、私達の消費生活は、原因面からも解決面からも、地球規模の環境問題と関わりあっています。

このように考えた場合、私達の身近な衣食住の問題と、グローバルな問題の関連を意識しつつ、交通・エネルギー・上下水道・ゴミなど社会資本のあり方を見なおす、また、そうした社会資本の見なおしとの関連で企業の本業（本業

とは別の社会貢献活動としてではなく) それ自体における事業活動を評価する、  
こうしたことが、これからの消費者活動のテーマとなりうるのではないでしょ  
うか?

環境クラブでは、現在、「こども環境クラブ」に取り組み、子供達に海の汚  
染や酸性雨について、体験・参加型のプログラムを提供しています。

今後、「大人」に対しても、いろいろなインターフェースを提供する企画を  
進めていきたいと思えます。

環境クラブ 増山 博康

<http://www.ecoclub.co.jp>

-----

●06/02 丹羽敏明さんより：134 号の配信御礼と便り

134 号の配信ありがとうございました。

イラクの実情は皆さまご存じの通りですので説明を省略します。そこで「イ  
ラクからの自衛隊の即時撤退を求め、憲法改悪に反対する意見広告」を全国紙  
に掲載しようという運動が始められています。個人は 2,000 円 (掲載に要する  
諸経費) の会費を納入して参加することになります。今年の 8 月 15 日の掲載を  
目途としていますが、事態の進展状況によっては 7 段ないしは 10 段の掲載にな  
るかも知れないとのこと。この意見広告はすでに 1 月 15 日と 16 日に「朝日  
新聞」全国版と「北海道新聞」に、「イラク派兵と憲法改悪に反対する市民の  
宣言—私たちは戦争に協力しません」と題して実行され、大きな反響を呼びま  
した。今回はその第二弾です。趣旨に御賛同下さる方は次記に資料請求して下  
さい。詳しい趣旨説明文と振替用紙を送ってくれます。

『郵便 151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-29-12-305 「市民の意見 30 の会・  
東京」 』。

電話・Fax : 03-3423-0185、ホームページ : <http://www.ikenkoukoku.jp/>

---

<旬を食べる—野良からの便り・3> “キヌサヤエンドウ”

---

キヌサヤエンドウは、いまが旬である。私のむらでは「サドマメ」と呼んでいる。甘い味から砂糖を連想しそう呼ぶのかもしれない。爽やかな緑とシャキシャキとした歯切れがポイントだ。花が終わると10日位で収穫適期となる。莢の長さ5〜6cm、厚さ4〜5mmが食べごろ。10本も植えておくと、毎日食卓に上り味噌汁の具が何日も続く。摘んできた莢の筋を取るのが子供の役目。これにはコツがある。ガク（付け根）の方から腹の筋を取り、回しながら背の筋を取る。

なぜ、キヌサヤか。絹のように柔らかかという説と、莢と莢との擦れ合う音が衣擦れの音という説とがある。採りたての莢は、まさに後者。かすかだが、新鮮さが音色で伝わる。

松田聖子の歌う「赤いスイートピー」も、エンドウの花だ。春を代表する香りの高い花で、麝香豌豆とも呼ばれる。理科で習ったメンデルの法則もエンドウが実験材料だった。今から約150年前、その頃、日本でも各地で栽培されるようになったと言う。

この初夏の味覚、キヌサヤエンドウも中国等からの輸入で、国内での生産が大幅に後退している。でも、キヌサヤエンドウも鮮度が勝負。店頭まで4〜5日かかる輸入品は、ガクが茶色に変色している。鮮度はこれで見分けられる。中にはごまかすために、このガクを除いたものがある。要注意だ。

幸い病虫害も少なく作りやすい。ベランダ園芸で十分衣擦れのエンドウが楽しめる。

小泉 浩郎  
山崎農業研究所事務局長  
y.noken@taiyo-c.co.jp

---

<日本たまご事情>オムライス

---

「トリ屋さんたち、本当に美味しいタマゴ料理を食べたことがあるの？」とニワトリ博士の得猪さんにけしかけられたので、このところすっかりオムライス（オムレツライス）に取り付かれています。

日頃、鶏とタマゴに明け暮れているトリ屋にとっては、外に出てまでタマゴ料理を食べる気がしないものだ。ところが、ほんとうに美味しいタマゴ料理を食べたことがあるかと聞かれば私も自信がない。毎日一層懸命、タマゴを生産してはいるが、それがどのように美味しい料理となって現れるか、確かに多くのトリ屋さんたちは無頓着のようだ。

早速、得猪さんお薦めの東京日本橋の「たいめいけん」に行ってみた、目指すはオムレツライスである。ここのオムレツライスには二種類あって、一つはケチャップライスをオムレツで包んだものと、ただ上に乗せただけのものがある。ソースはトマトケチャップそのもの。一品で 1650 円も取られたがさすがに美味しい。

先週、西のチャンピオンといわれる大阪心斎橋の「北極星」に行ってきた、ほとんどのお客がここのオムライス（この言葉もここから始まったと言う）を目当てにやって来る。古い民家をそのまま使って、中庭までありいい雰囲気だ。典型的なオムレツライスで、ソースはこの店独特のものであり、外販もしていた。オムライスの横にすし屋のガリがちょこんと添えてあるのもこの店の特徴だ。一品で 682 円とは嬉しい、勿論味は「たいめいけん」のそれと勝るとも劣らない、さすが大阪である。

かくてこの二つの店の味を基準に、オムライスを食べる旅は始まった。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp/>

---

#### <山崎農業研究所情報>

---

◇山崎農研・日仏農学会合同研究会（第 112 回 定例研究会）速報（その 1）

2004 年 5 月 22 日 太陽コンサルタンツ会議室 司会 大山 勝夫氏

〔研究発表 1〕

環境保全と生態系と地球環境：陽 捷行氏（農業環境技術研究所理事長）

#### 1. 経済と環境との関わり

すべてが変わったのは、1969 年である。この年、宇宙船アポロが映し出した

青い地球に、はじめてわれわれ自身を見た。地球は 46 億年前は金星や火星とはじめは似たような生物の住めない太陽系の惑星であったが、地球だけが唯一生物の住める環境になった。この環境はまさに得難いものだ。物質が分化して物質圏をつくり、やがて生物圏、人間圏の誕生となるが、地球の長い歴史から見れば人間圏の誕生は一瞬前の出来事にすぎない。このような意味で地球環境は貴重な存在であるが、これを急速に悪化させているのは人間の経済活動である。経済の中に環境を位置づけているからである。

## 2. 20 世紀と 21 世紀の問題

地球環境変化は経済活動の結果として起こった。20 世紀後半は科学のめざましい発展があった。生活は一面、豊かになったが、環境に対する理念がなかった。いま 21 世紀には炭酸ガス、窒素などが自然の循環を狂わせ始めていることが誰の目にもはっきりわかるようになった。いま環境問題を、経済を始め倫理の問題として、文化的視点で人間のスケールで考えねばならぬ時代となった。

地下水には窒素が自然の状態の 10 倍の濃度で混入している。人口、エネルギー消費の増大、食料不足などが起こる。地球には作物を生産するに必要な土壌が 18cm、食料生産に必要な水は 11cm、紫外線遮断に必要なオゾン層は 3 mm（地球表面の一定温度と気圧下に換算）しか存在しない。特にわが国では土壌は年に数分の 1 mm しか生成されない。3 億 5 千万年前から積み上げられた土壌は侵食や汚染で減少している。水の利用も 50 年前の 3 倍になっている。水資源の世界的涸渇が深刻になることが予告されている。

地球気温の温暖化が最近になって加速されている。これは人間の経済活動の結果として、大気中の窒素酸化物、炭酸ガス、メタンガスなどが増加したことによると科学的に証明されている。グローバルな経済活動がエコシステムを破壊したのである。今後は『環境の中に経済活動がある』という認識が重要である。

## 3. 環境保全型農業の必要性

その基礎は人口、食糧、農業、環境、倫理に関わる問題である。水対策と同時に土壌侵食対策が重要になる。これには森林と草地の保全がもっとも重要である。環境保全型農業政策の推進のために 1999 年に食料・農業・農村基本法や環境三法、有機農産物の検査・表示制度が、2000 年には有機農産物の農林規格、循環型社会形成推進基本法、食品循環資源の再生利用法等の法律が定められた。

環境保全型農業の目標として地球温暖化ガスの削減のための水田利用、施肥の管理技術を創出し、人と自然との共生を図り、エコファーマーの育成などを目指す。持続型農業と環境保全型農業が両立する技術開発などが求められる。環境資源は「有限」である。循環型社会だけでは環境は守れない。そこで環境倫理のもとに「有限の地球から資源を借りて生きる」という考え方を導入せざるをえないであろう。このことを含む環境保全型農業実現のためには国家的役割の大切さを認識することが 21 世紀の農業にとって重要である。

(文責：安富・松坂)

※詳細は所報『耕 102 号』に掲載予定。

所報『耕』の申し込み先 (定価 1,000 円)

160-0004 東京都新宿区四谷 3-5 太陽コンサルタンツ内 小泉浩郎

電話 03-3357-5916 FAX 03-2257-3660

k.koizumi@tayo-co.jp

---

<79 歳の意見>年金問題の影で日米戦時体制は進む

---

年金未納議員の弁明を聞くと、自分の老後の心配は無く、国民の相互扶助の考えが欠如している。このことが、いかに政治不信の原因を作ったか自覚がない。

自民・公明党は仲間内だけをかばい現政権の保守に汲々としている。民主党は政権奪取の道具にしている。自己の無責任を忘れ、議会政治の空洞化に気がついていない。

こうした茶番劇の蔭で、日本は着実に軍事同盟の戦時体制を進めている。

イラク派遣の自衛隊は交代のため第 2 次派遣部隊がサマワに入った。5 月 20 日有事関連 7 法案が衆院を通過し、今国会で成立する。日米軍事同盟がさらに強化され、戦時体制は進む。

昭和 13 年、日中戦争のため国家総動員法の公布により、本格的戦時体制が確立した。これが太平洋戦争に発展し昭和 20 年の敗戦まで、国民経済・生活を政府・官僚に統制され、いかに苦しめられたか思い出すのはわれら老人ばかりではないだろう。

アメリカのイラク戦争開始にいち早く小泉内閣は賛同し、自衛隊派遣を決定

した。平和憲法に反して戦後初の海外派兵を実行に移した。この時から日米同盟の戦時体制が始まった。

しかし、イラク戦争は今や泥沼化した。米国はイラク社会に対する無知と武力をもって押さえつける政策で、イラク社会を反米闘争に団結させてしまった。さらにおぞましい性的下劣な虐待でイラク人の反感を増幅させた。アメリカは国内でも非難され、国際的にも、アメリカ人の精神的退廃によって信用を無くしている。

イラク全土にわたる反米武装勢力の闘いはやがて日本自衛隊の駐留するサマワにも及ぶだろう。それでも日本は派遣を続けるのか。有事法の成立で国民は、第2次大戦の長い無惨な戦争と同じ状態に巻き込まれて行くのか。

小泉総理は、参議院選挙めあての北朝鮮再訪問で、世論調査の人気を取り戻したかに見えるが、国民の命を軽くみたという安否不明者家族からの批判にもあるように、小泉外交の軽薄さは否めない。ブッシュや金正日の言いなりになっている小泉政権を続けてよいと国民は本当に思っているのか。

われわれは、いまこそ、日米軍事同盟の戦時体制をいかに阻止するか、来る参議院選挙にその態度を示すべきだと思う。

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

tom@nazuna.com

<http://nazuna.com/tom/>

---

<丹羽敏明の戦争体験> 35 “こぼれ話” (その2)

---

○女の子=シンガポールで初めて外出したとき、インド人らしい女の子が近づいてきて、「マスター、私と遊ぼう」という。「何をして遊ぶの」と聞くと、「私、○○○（現地語で性交のこと）出来るよ」という。「お嬢ちゃんいくつ?」と聞いたら「八歳」だという。私がびっくりした顔をしていたら衣服を捲くり上げて恥部を見せ「マスター、見て、ちゃんと出来るよ」と平然という。南方の女性は早熟だとは聞いていたが、戦争のためにこんなたいげな子供までが理不尽な稼ぎを強いられているのかと、暗澹たる思いと同時に物凄いカルチャーショックに暫し呆然としていた。

○兵補＝シンガポールの兵站で宿営していたとき、夜間警備をすることになった。衛兵司令から「草むらの中には毒を持った蛇がいるから十分気をつけること。なお、警備区域には兵補と称する現地人を配置して警備させている。彼らも銃を持っているから誤射されないように」という注意事項が示された。警備するのは小高い岡の上にある日本企業の工場付近らしいが、雑草が生えており、常夜灯もなく、真っくら闇だ。建物に沿って進むうち突然闇から溶け出した影に「誰か、誰か、誰か」と続けて誰何された。兵補だとすぐ判ったので「待て、日本軍だ」と答えたが、我々が教わった作戦要務令？では、夜間動哨の際怪しいものを見つけた場合は「誰か」と誰何し、返事がない場合は少し間をおいて再び「誰か」と誰何する。そして3回誰何しても応答がなかったら発射すべし、と記憶していた。ところが兵補は怖いものだから続けざまに3回誰何してドンとやるらしい。彼らは色が黒い上に裸足だから近づいても音がしないし、側まで来ても気がつかない。危うくドンと一発食らうところだった。

○辛口の女＝ジャワの兵站には3カ月ぐらい滞在していた。外出を何回かするうち食堂のウエイトレスと懇ろになった。オランダ人とのハーフなので色白の美人だった。いよいよシンガポールへ出発することが決まったので食堂へ行き、別れのあいさつを言った。彼女は涙ぐんでいたが、そのうち奥へ駆け込み、しばらくしてさっぱりした顔をして戻ってきた。「きっと生きていて下さい。最後にお別れのキスを」というので、要望に応えたら、彼女の口の辛いのにびっくりした。彼女は気分が高まると唐辛子をかじって気を落ち着かせるのだとか。それで奥へ駆け込み唐辛子をかじってきたのだと言う。ジャワの美人は辛口の女でした。

○路傍の人＝終戦まで駐屯していたマレー・スングパタニは小さな街であるが航空基地を擁していたので、日曜日などは外出する兵隊で賑わっていた。日本人の元気なお婆さんが経営する「日の丸食堂」というのがあって日本兵が常連客だった。その食堂の側の道端に現地人の男性が寝ころがっていた。見ると下腹のあたりが潰瘍状態となり、ハエがたかり蛆虫が蠢いていた。そして私に「キニーネを下さい」と言う。目をみると熱病患者特有のうるんだ目をしていた。「この次に外出したときに持って来て上げるよ」と言って別れた。キニーネは現地人には絶対に渡してはならぬと言われていたが、次の外出の際密かに持ち出し、そこへ行ってみたが現地人は居なかった。食堂の婆さんに聞いたが最近見かけないと言う。私が約束したことを信用できなかったのか、他の場所へ行って、そこで死んだのかも知れない。それくらい衰弱していた。悲惨な戦争犠牲者の典型を見せつけられた思い胸が痛んだ。

---

<農文協図書館情報> (5/22-31 更新)

---

◆ニュース:閲覧CD-ROMリニューアル

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklip/sp/200405/news1.html>

・更新5点、新規6点です。館内閲覧のみ可能です。

◆2004.4.1～4.30 登録の新規収蔵図書

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklip/book/01new.html>

◆話題の図書：

聞き書 ふるさとの家庭料理『別巻 祭りと行事のごちそう』

春夏秋冬の祭り、桃の節句・端午の節句・七夕・お盆・報恩講などの季節の行事、さなぶり・刈上げ祝いなどの休み日。暮らしのリズムをつくり上げてきたこれらのハレの日のごちそうを全都道府県から採録して月別に紹介

2004年04月05日 農山漁村文化協会 編集・発行

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklip/book/03wadai020.html>

・目次(抜粋)

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklip/book/03wadai020m.html>

◆寺尾五郎文庫

(1921～1999、

政治社会運動家、日本の革命的民衆思想研究家、安藤昌益研究家)

書籍・資料総点数は、10422件

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklip/book/090teraobunko.html>

・目録その1(その5まで順次公開してまいります)

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklip/list/090terao/tg38/01.html>

\*個人文庫は館内閲覧・コピー・FAXサービスのみ利用可能です。

農文協図書館 IT担当 原田太郎

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklip/>

---

<編集後記・同人の近況報告> (5月20日～6月2日)

---

5月22日に行なわれた山崎農研・日仏農学会合同研究会に出席した。陽先生は冒頭、「1969年、宇宙船アポロが映し出した青い地球に、はじめて、われわれ自身を見た」と述べられたが、当時、わたしは5歳だった。翌1970年に大阪で開かれた万博の目玉が月の石であったことはかすかに記憶にある。

それから30年以上がすぎた。その間、せまい意味での「経済」の目から見れば日本は成長し続けた。しかし、その代償として、身の回りから自然はなくなり、なによりも農村の風景がかわった。そこに棲む生き物が少なくなり、そして農家の数が減った。

こうしたことと、食の安全・安心が問われるようになってきたこととは、無関係ではない。「経済」重視から「暮らし」重視へ、あるいはファーストライフ・ファーストフードからスローライフ・スローフードへ。変わるべき方向は見えているのだが、現実はなかなかそうならないのがもどかしい。

(山崎農業研究所・田口 均)

---

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

---

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。

2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。

3、1回1テーマ、10行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末にURLを。

5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

---

◎投稿アドレス変更のお知らせ

---

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

[y.noken@taiyo-c.co.jp](mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp)

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

-----

次回 136号の締め切りは6月14日、発行は6月17日の予定です。

最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしくお願い致します。

---

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

---

書名：岩波アクティブ新書 45『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735円 発行日：2002年10月4日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

---

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html)

<本誌記事の無断転載を禁じます>

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第135号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag2.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html)

2004.06.03（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

\*\*\*\*\* ここまで『電子耕』 \*\*\*\*\*